

# 阿蘇の みんなの家

## 東北の経験を、熊本につなぐ

東日本大震災の翌年に発生した熊本広域大水害は阿蘇地域を中心に大きな被害をもたらしました。熊本県では被災者の痛みを最小化し、被害を受けた方に少しでも安らぎを感じていただけるよう、仙台市宮城野区にみんなの家を提供するプロジェクトで培ったノウハウを生かし、県内で初めて「みんなの家」を建設するプロジェクトに取り組みました。阿蘇市に建設された仮設住宅の2つの敷地それぞれに入居されている方の意見を聞きながら設計を進め、工事着工から約1ヵ月という短い期間で2棟の「みんなの家」が完成しました。





阿蘇みんなの家（池尻・東池尻住宅） / 住民の方からの意見を踏まえて、土足のまま上がって使えるよう、広い土間空間を設けた



阿蘇みんなの家（高田住宅） / 住民の方からの意見を踏まえて、子どもからお年寄りまで使いやすいよう、フラットな畳空間と掘りごたつ式のテーブルを設けた



住民の方との意見交換を行いながら、みんなの家の設計が進められた



上棟時の餅撒き



みんなの家は住民の憩いの場として活用された

# 熊本の みんなの家

規格型・本格型

## できる限り多くの仮設住宅に憩いの場を

平成28年の熊本地震では、東日本大震災や熊本広域大水害での経験を生かし、4303戸建設された仮設住宅に設置する集会施設を全て「みんなの家」として整備し、その数は84棟となりました。仮設住宅の整備に合わせて迅速に建設できるよう、東北や阿蘇での「みんなの家」の設計を生かして規格プランに統一した「規格型みんなの家」。そして大規模な団地には複数の「みんなの家」を整備することとし、そのうちの1棟は「本格型みんなの家」として住民の意見を伺いながら個別に設計しました。



©Kyoko Omori



規格型みんなの家 / 集会所タイプ (60㎡) は広い土間空間が特徴



広場と一体的に利用できる配置計画



みんなの家は住民の方が集まりやすい場所に配置した



規格型みんなの家 / 談話室タイプ (40㎡) はフラットなフローリングと畳の空間



甲佐町白旗のみんなの家 / 気軽に立ち寄りやすくなるよう配置やデッキ・縁側の位置を工夫し、子どもからお年寄りまでの憩いの場として活用された





西原村小森第2のみんなの家/ 住民の方との話し合いにより、「鍵をかけなくてもよい、いつでも使えるみんなの家」となった



©針金洋介



本格型みんなの家は住民の方と意見交換を重ねて設計を進めた



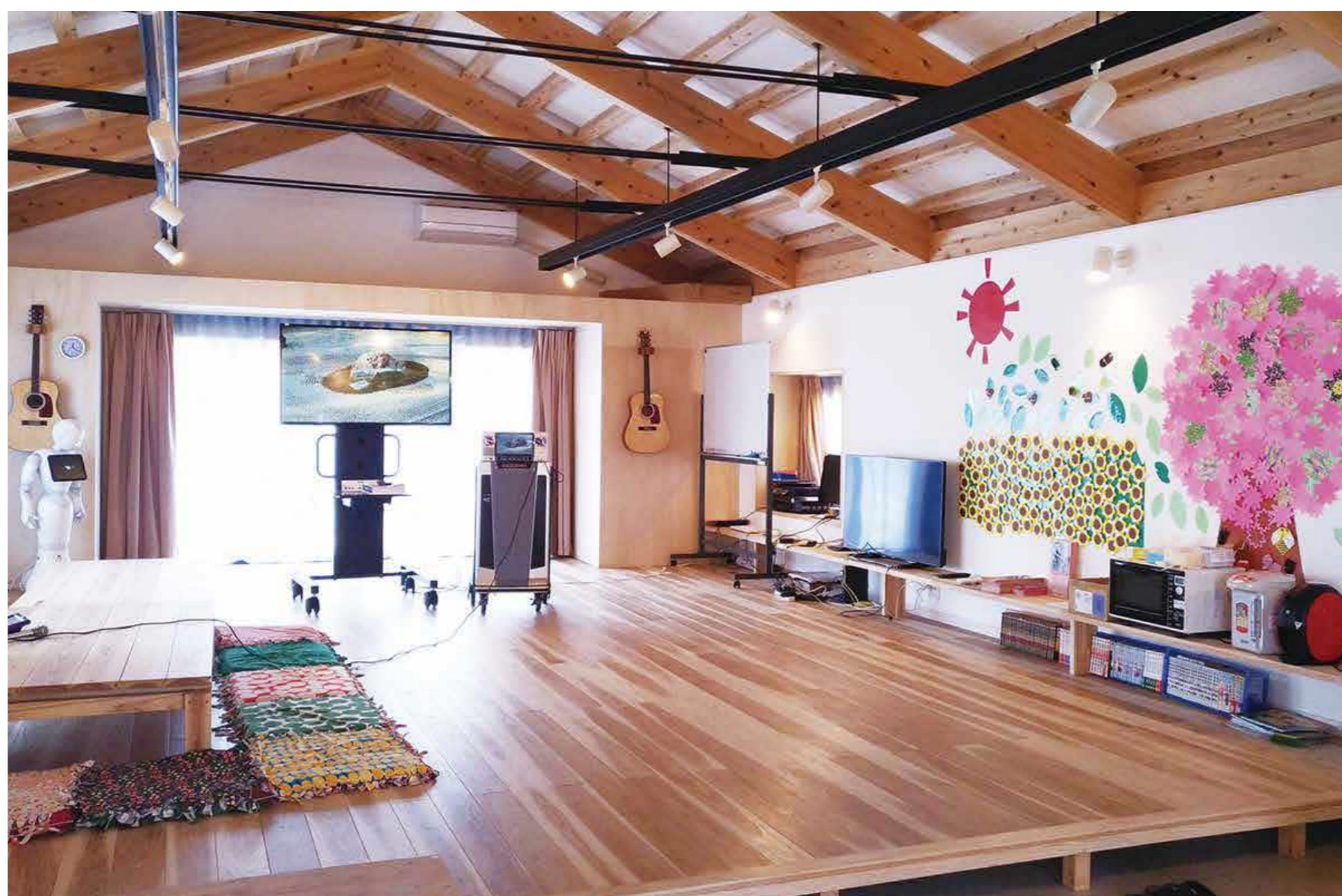
西原村小森第3のみんなの家 / 可動式家具により様々なレイアウトが可能



小森第4のみんなの家 / 住民の方の意見を聞きながら、みんなが集える「本の家」として計画された



南阿蘇村陽ノ丘のみんなの家 / かつて地域で行っていた料理教室を復活したいという意見を基に、大きなキッチンを中心として計画された



益城町テクノのみんなの家 / 県内最大の仮設団地（516戸）に計画され、集会機能と、住民の見守りを行う福祉機能を併せ持つみんなの家となった



益城町小池島田のみんなの家 / 「みんなのリビング」として気兼ねなく集まれるよう、軒下の広いデッキを設けたプランとなった



益城町木山のみんなの家 / 規格型みんなの家と広場を介してL型に配置されており、広場を中心に一体的に利用できる計画となっている



# 「あたたかさ」「ゆとり」「ふれあい」のある仮設団地を目指して

仮設団地の整備にあたっては、伊東豊雄コミッショナーからの助言を受けながら、被災された方々の痛みを最小化し、少しでも豊かに暮らしていただけるよう配置計画を工夫しました。

## <熊本の仮設住宅計画の特徴>

- 従来よりもゆったりとした配置計画とし、掃き出し窓や縁側を各住戸に設置
- 集会施設を「みんなの家」とし、「みんなの家」に隣接して広場空間を配置
- 住戸は3戸程度までの長屋とし、住棟間に小路(コミュニティ動線)や木製ベンチの設置



住棟間に設けられたベンチと軒下空間、住棟間のコミュニティ動線



従来よりも広く、ゆとりのある住戸配置



ゆとりを持った整備により生まれた余白の空間は交流の場にもなった



全ての住戸に設けられた縁側空間



「みんなの家」と広場空間を活用したそうめん流し



「みんなの家」や交流広場では様々な催しが行われた

# 熊本の みんなの家

## さらなるコミュニティ形成支援の試み

プ  
ッ  
シ  
ユ  
型

平成28年熊本地震では、集会施設を整備していない20戸未満の小規模な仮設団地を対象に、「日本財団わがまち基金」により支援をいただき、関係市町村と協議しながら11棟の「みんなの家」を整備しました。一般財団法人熊本県建築住宅センターとの協働により進められたこのプロジェクトは、入居者の方と意見交換を行いながら計画を進め、様々な地域から集まった世帯が生活するうえで、孤立しないよう、気軽に集い、コミュニティが創造されることを願い、それぞれ特色のある「みんなの家」が整備されました。







御船町玉虫のみんなの家／親しみやすい傘のような屋根



美里町くすのき平のみんなの家／たこ焼きパーティを催しつつ、大工や住民の方と一緒に施工の最終仕上げが行われた



御船町甘木 of みんなの家／特徴的な大きな軒下



宇城市曲野長谷川のみんなの家／公園のように気軽に



阿蘇市内牧のみんなの家／水辺に向かい張り出すデッキ



宇城市御領のみんなの家／求心性のある正方形平面



宇土市境目第3のみんなの家／広場に面したテラス空間

熊本 of みんなの家（プッシュ型）ーさらなるコミュニティ形成支援の試みー



熊本市さんさん2丁目のみんなの家／子どもからお年寄りまで集える共同のリビングルーム



宇土市境目第2のみんなの家／全面道路の桜並木を楽しむ配置



宇土市新松原のみんなの家／変形敷地に建つ、三角形プラン。仮設住宅の閉鎖後は地区の公民館として活用されている



室第二のみんなの家／交流の結節点となる門型で風通しの良いプラン



地元の小学校や高校の通学路からみんなの家が良く見える

熊本のみんなの家（プッシュ型）一さらなるコミュニティ形成支援の試みー

# 熊本 みんなの 家

公民館型

## 地域の拠り所、つながりの再生

平成28年熊本地震では、地域の住民が集う公民館も被災しました。住民は集い、語らう場としての公民館の再建を待ち望んでいました。熊本県では、仮設住宅団地に「みんなの家」を整備してきた経験を生かし、日本財団から「わがまち基金」の支援を受け、一般財団法人熊本県建築住宅センターとの協働により、被災した地区の公民館を地域再生の拠点となる「みんなの家」として整備する取組みを進めました。住民の方と意見交換を行いながら計画を進め、県産木材を使用し、避難所としても利用できる防災機能を持つ「みんなの家」が10棟整備されました。





©Vincent hecht

嘉島町北甘木のみんなの家



©Vincent hecht

嘉島町上六嘉のみんなの家



©Vincent hecht



©Vincent hecht

大津町高尾野のみんなの家



©Vincent hecht

大津町新小屋のみんなの家



©Vincent hecht

西原村大切畑のみんなの家



西原村風当のみんなの家



大津町上場のみんなの家



甲佐町麻生原のみんなの家



南阿蘇村立野駅区のみんなの家



西原村下小森のみんなの家



被災して使えなくなった公民館の再建を心待ちにしていた住民の皆さんにより、みんなの家の上棟や竣工の際には様々な催しが開催された



# みんなの家 利活用

## 地域の核として生き続ける 「みんなの家」

平成28年熊本地震の際に、仮設住宅団地の集会施設として整備された「みんなの家」。被災された方の憩いの場や、地域の復興を語り合う場として大切に活用された「みんなの家」は仮設住宅団地の閉鎖に伴い、当初の役割を終えることとなります。熊本県では、この「みんなの家」を、新たなコミュニティづくりの場や地域づくりの拠点として、移築などにより活用する取組みを進めています。解体に伴う廃棄物を減らすだけでなく、それを地域の復興のために活用する、持続可能な社会の実現に向けた取組みです。





袴野集会所（西原村）／小森第3のみんなの家と規格型みんなの家を合築し、被災した公民館を再建。みんなで話し合いながら計画を進め、地区の風景に溶け込んでいる。



©Kyoko Omori



©Kyoko Omori



©Kyoko Omori

新阿蘇大橋展望所（南阿蘇村）／陽ノ丘のみんなの家を移築し、地震で崩落した橋を新たに架け替えた新阿蘇大橋のたもとに展望休憩施設として移築された。震災の記憶を継承するため、仮設住宅内で活用されていた当時の写真を壁面に遺し、外壁には仮設住宅の縁側などに使われていた木材を再利用している。



田中公民館（益城町）／小池島田のみんなの家を移築し、被災した公民館を再建



嘉島中学校コミュニティ施設（嘉島町）／学内の交流や特別支援教育の拠点に活用



府領公民館（甲佐町）／白旗のみんなの家と規格型みんなの家を合築し、被災した公民館を再建。特徴的な梁の色は地区が元気になるようにとみんなで話し合って決められた



菊陽南小学校放課後児童クラブ（菊陽町）／木の温もりのある学童保育施設として活用



下砥川公民館（益城町）／当時のみんなの家の表札も活用



七滝中央小学校放課後児童クラブ（御船町）／隣接保育園の園児が曳家をお手伝い



御船町ふれあい広場交流センター（御船町）／仮設住宅の敷地となっていた公園内に移築し、町の新たな交流拠点として活用されている



# 令和2年7月豪雨

## 繰り返される自然災害への対応



熊本地震から4年後に発生した令和2年7月豪雨では、熊本県の県南地域を中心に甚大な被害を受けました。熊本県では808戸全ての仮設住宅を木造で整備するとともに、仮設団地内には20棟の「みんなの家」を整備しました。これまでの度重なる自然災害への対応で積み重ねてきた経験を生かし、発災から7日後には木造仮設住宅や「みんなの家」の建設に着手。山間部の集落での被害も大きかったことから、より小さな単位でのコミュニティ形成を想定し、熊本地震より、さらに小規模な仮設団地にも「みんなの家」を整備しました。



みんなの家（集会所タイプ）



みんなの家（談話室タイプ）

